
IS インフィニット・ストラトス ~完成したIS~

キューティクル雅彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス ～完成したIS～

【Nコード】

N2348Y

【作者名】

キューティクル雅彦

【あらすじ】

普通で普通なオリ主に、篠ノ之東が普通じゃないISを渡した。それは、第零世代機と篠ノ之東は称していて……？という感じのお話し。

たまに文が荒くなったり、ギャグとシリアスの落差が激しかったりするかもしれません。

プロローグ

佐藤勇氣は普通の人間だった。

特別な知り合いも居なければ、悲劇的な過去も、衝撃的な秘密も無い普通の人間。

成績も平均……よりちょっと下くらいだし、運動神経もそんなに良くない。

苗字も日本で一番多い苗字だし、名前も「誰よりも勇氣を出せる男の子になりますように」なんて、ありきたりな理由からつけられた名前だ。

ゆえに、だからこそ。そんな普通な人間だからこそ。

佐藤勇氣は、篠ノ之束に選ばれた……のかもしれない。

IS

正式名称 インフィニット・ストラトス

元々は宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。

しかし宇宙進出は進まず、スペックを持てあました機械は“兵器”へと変わり、各国の思惑から健全な“スーツ”に落ち着いた飛行パワードスーツだ。

ただ、この現存する全ての兵器を凌駕する程のスペックを持ったISには決定的な“欠点”があった。

それは、男性には使えない事。

その欠点の一部の人間に『女性は偉い』という考えを生み出した。

そして、その考えはたった数年で『女尊男卑』という不完全な世界を作り上げていったのだった。

しかし、数か月前。この不完全な世界に一つの異常が現れた。

それが、人類初の『男性IS操縦者』の登場である。

「……………ううう」

男性初のIS操縦者、織斑一夏 おりむら いちか は、机にうつ伏せになってうめき声を上げていた。

ここはIS学園。

ISの操縦者を育てる為に作られたこの教育機関には、当たり前のように女子しか居ない訳で、その中に男子が放り込まれれば必然的に注目が集まる訳で……。

今も、一夏は少なからずの視線を感じていた。

しかし、今一夏を苦しめているのは女子からの視線ではない。

“ 思わぬイレギュラー ” により、思っていたより視線は少ないし、何より学園初日でも二時限目まで過ぎた今では、段々と視線にも慣れてきたのだ。

ならば、なぜ呻いているかといえば

（なんで、授業がこんなに難しいんだよ……）

IS学園での初授業。先に渡されていた資料を間違え捨てるという
ポカをしてしまった一夏は、早速授業についてこれなくなっていた
のだ。

しかも一夏と“もう一人”以外、全員ちゃんと理解出来てるという
ことで、授業中微妙な空気にしてしまい、それも一夏を追いつめて
いた。

「……………よしっ！」

しかし、いつまで気にしていても仕方ない。

教室の最前列に座っていた一夏は切り替えるようにして後ろを振り
向く。

目に映るのは、やはり白を基調とした制服を着た女子生徒ばかり。

しかし、その中にある一つの異物。

それは、“思わぬイレギュラー”で、“もう一人の授業に追いつけなかった生徒”で。

もう一人の、“ISを動かせる男”

1週間前、織斑一夏の騒動も冷めやらぬ中、もう一つの話題が世間を騒がせた。

それは、ISの開発者でもある篠ノ之束が新たなISを操縦できる男を見つけたというニュース。

もちろん、そんな話題にマスコミが食いつかない筈が無く、その操縦者は一躍世界的に名が有名になった。

それがこの男子、佐藤勇氣 さとう ゆうき だ。

どうにもIS学園の制服が間に合わなかったらしく、周りとは正反對の色をした真っ黒な学ランを着ている。

白の中に黒。女子の中に男子と、どう考えても目立つ風貌をしていた佐藤勇氣は、周りの生徒の視線の大半を集めていた。

そのおかげで、一夏に集まる視線も少なくなっていたのだが。

しかし、視線を向けられている当人は気にした様子も無く、何か分厚い本を読んでいる。

(……………意外だな)

それを見た一夏の感想だった。

佐藤勇氣は、天然パーマに死んだような目と、対してチャラくも無ければ、真面目そうでもない　言ってしまうえば、見るものにマイナスなイメージしか与えそうにない外見をしているのだ。

だからこそ集中して本を読んでいる姿を、一夏は意外に思っていた。

しかし、数少ない男子。

どうせなら仲良くしたいと考え、そちらに足を踏み出したその時。

「ちょっと、よろしくて？」

見知らぬ女子生徒が一夏を引き止めた。

「ん……？」

いきなり話しかけられた為か、少し間の抜けた声で返す一夏。

見ると、欧州人なのか金髪碧眼に金髪を縦にロールした、ラノベにでも出てきそうないかにもお嬢様といった風貌の女子生徒がいた。

「まあ、なんですのその返事！ 私に話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というのがあるんじゃないですか？」

一夏……というより、男を見下すような視線を向ける女子生徒。

それは、今の世界の不完全さを象徴するような態度だった。

「……悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

このような手合いが苦手な一夏は早々に話題を切り上げようとする。

しかし、その返答が気に入らなかったのか、その女子生徒は声を荒げながら一夏に詰め寄る。

「なっ……！ 私を知らない！？ セシリア・オルコットを！？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を！？」

「あ、質問いいか？」

そんな女子生徒 セシリア・オルコットの態度をあまり気にせず、一夏は手を上げる。

「フフッ……。下々の者の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

一応、質問の許可を貰った一夏は真面目な表情で、しかしながらセシリアからしたら信じられないような質問を口にする。

「代表候補生ってなんだ？」

瞬間、聞き耳を立てていた生徒達がずっこけた。

「……………」

「し……信じられませんわ！ 日本の男性というのは皆これほど知識に乏しいものなのかしら……。常識ですわよ、常識！」

呆れたように声を上げるセシリア。言葉の途中でもう一人の日本人男性の方にも目を向ける。

一夏も習って目を向ける。しかしそこにいる佐藤勇氣は、気にしていないのか気づいてないのか、相も変わらず本を読んでいる。

同じ男同士少しは助けてほしいと思った一夏だったが、仕方なしにセシリアに再度質問する。

「……………」で、代表候補生って？」

先ほどの態度はどこへやら、今度はどこか誇らしげに答えるセシリア。

「国家代表IS操縦者、その候補生として選出される“エリート”の事ですね。単語から想像したら分かるでしょう？」

そういえばそうだ、と頷く一夏。

セシリアはそこで止まらず、劇の様な身振り手振りで話しを続けていく。

「そう、エリートなのですわ！ 本来ならば私のような選ばれた人間とクラスを同じくするだけでも奇跡……幸運なのよ！ その現実をもう少し理解していただける？」

と、言われても一夏は今の今までその存在すら知らなかった身。

芸能人と同じクラスになった程度に受けとめれば良いのかと、適当に返事をする。

「そうか、そりゃラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの？」

「お前が幸運だって言ったんじゃないか……」

「大体、何も知らないクセによくこの学園に入れましたわね。数少ないISを操縦できる男と聞いてましたが、期待外れですわ」

「俺に何か期待されても困るんだが……」

一夏自身、ISを動かせる事を知ったのが数ヶ月前。

それまでのISとの繋がりがなんて精々、姉が世界大会で優勝してたり、幼なじみの姉がISの開発者だったりするくらいで……。

（あれ、結構繋がりが深くね……？）

いや、しかし。

繋がりが深いのは周りの人間であって、一夏自身はそこまでISに詳しくないのだ。

男で動かせるからって何でも知ってると思われては困る。

「フツ……。まあでも？ 私は優秀ですから、あなたの様な人間にも優しくしてあげても良くってよ？ 分からない事があれば……まあ、泣いて頼まれたら教えて差し上げますわよ。なにせ私は、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートなのですから！」

話しの大半を聞き流していた一夏だったが、一つの言葉に引つかかりを覚える。

「……入試ってあれか？ 教官と戦うやつ」

「それ以外に入試などありませんわ」

「ああ、それなら俺も倒したぞ。教官」

「なっ……！」

いや、正確には“倒した”とは言わないだろう。

一夏の相手をした教官。相手が男という事でどこか慌てたのか、勝手に壁にぶつかって自滅したのだ。

ゆえに一夏は戦わずして勝った事になり、倒したと言われれば倒したのだろうが、別に一夏が強い訳では無い。

しかし、そんな事情を知らないセシリアは真に受けて一夏に質問する。

「き、教官を倒したのは私だけと聞きましたけど……?」

「女子ではってオチじゃないか?」

もしくは、一夏のはカウントされなかったかだが。

納得できないのか、セシリアは言い返そうとする。しかし、それは授業の始まりの鐘に遮られてしまった。

「……は、話しの続きはまた改めて！ よろしいですね!？」

それだけ言つと自分の席に戻って行くセシリア。その後ろ姿を見て一夏はため息を吐く。

そこで当初の予定を思い出し、佐藤勇気の方を見る。

佐藤勇気はチャイムが鳴った事に気づかなかったのか、なぜかニヤニヤしながら未だに本を読んでいる。

チャイムが鳴った事を教えようとした一夏だったが、その前に担任

の教師が教室に入ってきたので大人しく席に座る事にした。

授業が始まり、教壇には先述した織斑一夏の姉であり、元世界最強である織斑千冬 おりむら ちふゆ が立っていた。

「それでは、この時間は実戦で使用する各種装備について説明する」
教科書を開きながら説明する千冬。しかし、途中で何かを思い出す様にして教科書を閉じた。

「と、その前にクラス代表を決めないといけないな」

クラス代表とは、再来週に行われるクラス対抗戦に出場する生徒の事だ。

それと同時にクラス長も兼任し、生徒会や委員会にも出席しなければならなくなる。

「ちなみに、一度決まったら一年間変更は無いからな。自薦他薦は問わない。誰かいらないか？」

面倒そうだと判断した一夏は他人事の様に話を聞いていた。

大体、普通の授業にすら追いつけていないのに、そんな事している
余裕は無い。

しかし、そんな一夏とは正反対の意見が周りから上がる。

「はいっ！ 私は一夏君が良いと思います」

「……お、俺！？」

一夏は思わず声を上げる。

しかしそんな一夏は無視され、どんどん賛成の意を示す生徒が増え
ていく。

そんな中、別の意見を示す生徒も出る。

「あ、じゃあ私は佐藤君で！」

「ふむ、織斑と佐藤だな。他に誰か立候補はいないか？」

じゃあ、ということは他の生徒達に対した考えは無いのだろう。

男だから、物珍しいから。そんな理由で変な責任を負いたくない――夏は、千冬に抗議しようとする。

「ち、ちよつと待ってくれ、俺は――」

「納得いきませんわ!!」

――夏を遮る様に、別の人間の声が教室に響いた。

声を上げたのはイギリス代表候補生、セシリア・オルコット。

「そのような選出認められません！ 大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！ このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと仰るのですか!？」

この言葉にはムツとする一夏。しかし、セシリアはそんな事に気づかず話しを続ける。

「実力から考えれば私がクラス代表に選ばれるのは当然の話。……それを物珍しいからといって極東の猿達を選ばれては困りますわ！ 私はISの技術を学びに来てるのであつてサーカスをする気はありませんから」

さらに顔をしかめる一夏。もう一人の男である佐藤勇氣はどう感じているのかと伺い見るが、相変わらず本を読んでいるだけだった。

「大体、文化としても後進的なこの国で暮らさなければいけない事自体、私にとっては耐え難い苦痛で」

ここで耐えられなくなった一夏は立ち上がり、セシリアを遮るようにして声を放つ。

「イギリスだって、大したお国自慢無いだろ。世界一マズい料理で何年覇者だよ」

「なっ………！」

思わぬ一夏の反撃にセシリアは言葉を詰まらせる。

しかしそれは一瞬の事で、すぐに反論する。

「美味しい料理はたくさんありますわ！　あなた、私の祖国を馬鹿にしますの！？」

目を鋭くして睨むセシリア。しかし、一夏も負けじと睨み返す。

「　決闘ですわ！！」

「……良いぜ、四の五の言うより分かりやすい」

声高らかに宣言するセシリア。

一夏も頭に血が上っていたのか、『今時決闘？』とか『何で戦うの？』という当たり前の疑問も抱かずに即答する。

「言っておきますが、わざと負けたりしたら小間使い……いえ、奴隷にしますわよ」

時代錯誤というか、所々性癖が見え隠れしてそんなセシリアのセリフ。

それでも一夏は何の疑問も無く応える。

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

今度は挑発するように言い放つ。

「それで、ハンデはどれくらいが良い？」

「あら……早速お願いかしら？」

「いや、俺がハンデをどれくらいつければ良いのかなーと……」

一夏の言葉を聞いたとたん、教室に笑いが巻き起こる。

それは別にプラスの意味ではなく、一夏を馬鹿にするような笑いだ。

「織斑君、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、昔の話だよ？」

「撤回するのも遅くないよ！」

その事に一夏はさらに不機嫌になる。だが、彼女達の言う事にも一理ある。

いや、別に男が女より弱いと思っている訳ではない。

ただ、セシリア・オルコットは代表候補生。それがどういう事かはまだ詳しく知らないが、強い事は確か。

決闘というのは恐らくISでの勝負だろうし、初心者の自分がハンデを貰うのはお門違いだろう。

なら、ハンデは無しで良い。

一夏がそう言おうとした、その時。

「
ククッ」

“男”の声が教室に響いた。

「ククツ……アハハハハ！」

それはまるで、一夏を馬鹿にする生徒達。その者達を馬鹿にする笑い方。そう、聞こえた。

勿論、声の主は一夏ではない。だとすれば。

このクラスに。この学園に。残る男性は一人しか居ない。

佐藤勇氣。

教室に居る者全員が、その人物に視線を向けていた。

「フフツ、アハハハハ！」

「……な、何が可笑しいんですの……？」

そんな、一種不気味にも思える笑い方をする佐藤勇氣に、セシリアは問いかける。

だが、一夏はここで自分が勘違いしていた事に気がついた。

学校の教室。分厚い本。その二つから、この前まで中学生だった一夏は佐藤勇気が勉強していると思っていた。

しかしそれは違う。

何故なら、佐藤勇気が読んでいる物は

(……ああ、そうか……あいつが読んでいるのは……)

そして、佐藤勇気はセシリアの質問に答える。

「いや、今週のいぬまるくん面白いな」って

(週刊少年ジャンプだあ……)

教室にいた全員がずっこけた。

というか、何で授業中にジャンプ読んでるんだよ。

勿論、そんな不真面目な生徒を担当の織斑千冬が見逃す筈もなく。

鈍い音が響いた。

千冬が手に持っていた出席簿を勇気の頭に叩きつけた音だ。

「痛……っ！ な、何するんだよ……！」

「授業中に漫画を読むな。それと、教師には敬語を使え馬鹿者」

二撃目。

今度は出席簿ではなく、勇気から取り上げたジャンプを振り下ろす。

「お、おい……！ ジャンプをそんな乱暴な事に使……わないで下さいよ……」

反論しようとするも、千冬の睨みによって尻すぼみになる勇氣。

その姿は誰から見ても情けなかった。

「ふ……ふん！ やはり男というのはその程度なのですね！！」

「黙れオルコット。貴様も授業中に勝手に演説をするな。立候補したいならそう言えば良いだろう。引っ込み思案か」

「な……！！」

調子を取り戻そうと声を上げるセシリア。しかし、それは千冬によつていとも簡単にへし折られた。

「さて……いい感じにオチもついたし、話しも纏まったな。勝負は一週間後の月曜、放課後に第三アリーナで行う。推薦された三人は用意しておくように。佐藤、お前もだぞ」

「……？」

話を聞いていなかった勇氣は首を傾げる。

「勝負？ 推薦？ 何のこと？」

「千冬姉……じゃなかった、織斑先生、何で佐藤まで？」

言ってしまうえば、この決闘は一夏とセシリアの個人的な理由。佐藤
勇気まで巻き込む必要は無い筈だ。

「もののついでだ。……どうせなら一番強い者にクラス代表になっ
てもらった方が得策だろう？」

「……ああ、なるほど。」

「……？」

やはり話しについていけない勇気。

そんな勇気に千冬は、ああ、そうだ。と思い出したように告げる。

「ちなみに私はサンデー派だ」

「なん……だと……？」

プロローグ（後書き）

パクリと思われる部分がある時があるかもしれませんが、二次創作
なので少しは勘弁して下さい。

日常の中に複線が入ってたり入ってなかったり

「はぁ……」

一日の授業が終わり、佐藤勇氣は重々しく溜め息を吐いた。

今日の授業、色々な事があった。

訳が分からないうちに決闘に巻き込まれていたり、ジャンプが没収されたり、ジャンプが没収されたり。

それと、ジャンプが没収されたりもした。

いや、よくよく考えると二つくらいしか主な出来事は無かったのだが、勇氣からしたら色々あったように感じたのだ。

大体、授業に追いつけていないのに何の因果で代表候補生と戦わなくてはいけないのか。

そんな事を考えている勇氣に近づく一人の男子生徒。

言わずもがな、織斑一夏だ。

「えっと……。佐藤勇気、で合ってるよな……？」

恐る恐るといった感じで話しかける一夏。先程の件で勇気の事を『変な人』インプットしてしまい、話しかけづらくなっていたのだ。

「ああ……。織斑ね。初めまして。早速で悪いんだけどジャンプ買ってきてくんね？」

「知り合って早々に使いつぱしり！？　どういう神経してんだ！！」

初対面でのまさかの挨拶に一夏は驚きの声を上げる。

「いや、仕方ないんだって。めだかボックスを読む前にジャンプ没収されたからさ……。先が気になってそろそろ禁断症状が出そうなんだ」

全く個人的な理由でパシリを強要しようとする勇気。ギャグパートじゃなければ、完全に小物の悪役だ。

しかし、人の良い一夏は笑顔で受け流し、話しを続ける。

「この学校じゃ数少ない男同士だし、仲良くしようぜ」

一夏は握手しよう、という意で手を差し出す。

しかし勇気はそれに気づかず、なぜか鞆をあさはじめた。

「ああ……。じゃ、これお近づきの印で」

鞆からお目当ての物を見つけた勇気は、それを差し出されていた一夏の手に握らせる。

「ほい、赤丸ジャンプ」

「……………」

色々と突っ込みたい所があった一夏だったが、全て飲み込み礼を言う。だが、その顔は少しひきつっていた。

「……………ちょっと良いか？」

そんな雑談をしていた男子二人に一人の女子生徒が話しかける。

長い黒髪を、リボンで一つに纏めているのが特長な女子だ。

「箒？」

「……織斑の知り合いか？」

女子生徒の名前は篠ノ之箒　しのの　ほつき　。

小学校四年正の時に引越した織斑一夏の幼なじみで、つい先程六年振りに再会したばかりだ。

一夏は簡単に説明すると、何の用かと箒を見る。

しかし箒の視線は一夏ではなく、勇気の方を向いていた。

「佐藤勇気だったな……」

「……？」

まさか自分に話しかけられると思ってなかった勇氣は、疑問に思いながら箸を見る。

「その……篠ノ之束がお前に専用機を渡したというのは本当なのか？」

篠ノ之束、という名前を言いづらそうに質問する箸。

勇氣は、そんな事かと言わんばかりに答える。

「ああ、本当だけど」

これは、ニュースでも報道された事なので隠す事でも無い。

そんな二人の会話に疑問があつたのか、一夏が手を上げる。

「……なあ、専用機ってなんだ……？」

「お前はそんな事も知らんのか……」

そんな質問をする一夏に、箒は呆れた顔をする。

「ISを作るのにコアが必要なのは知っているな？」

「ああ、それくらいは……」

コアとは篠ノ之束が製造した、ISの心臓部を成す物だ。

その製造方法は篠ノ之束しか知らず、その中身も『自己進化している』という事や、『コア同士がネットワークを繋いでる』という事くらいしか解っていない。

そして、唯一コアを製造できる篠ノ之束がコアを作る事を止めて失踪した今、世界に存在するコアは467個しかない。

「要は専用機持ちとは、貴重な467個の1つを個人として渡された者だ」

「へえ……」

説明を聞いて一夏は納得したように頷く。

467。

数字としては大きい方かもしれないが、世界規模で見れば少ない方だ。

その内の一つを渡されるということは、実はかなり名誉な事なのではないだろうか。

「じゃあ、勇気って凄いんだな……」

感心したように勇気を見る一夏。

いつの間にか名字から名前呼びになっているが、勇気はそれよりも気になる事があった。

「気になってたんだけど、篠ノ之つて篠ノ之束の親戚か何かなのか？」

箒はその質問に顔をしかめ、苦々しげに答える。

「……篠ノ之束は、私の姉だ」

「ふーん……もしかして姉さんが心配とか？ 悪いけど俺は篠ノ之束の居場所は知らねえよ」

「……別に、少し気になったただけだ……」

その表情に一切気づかなかった勇氣の質問に、篤は言葉少なに答えた。

よほどその話題に触れられなくなかったのか、二人に少し挨拶をしてからさっさと教室を出てしまった。

「……………篤？」

一夏はそんな幼なじみの態度に疑問を感じ、心配そうに呟く。

一方、勇氣はというと納得したように篤の事を見送っていた。

「そりゃまあ、あんな無愛想な姉の話しなんかしたくねえよな……」

人の事言えた態度じゃ無かったけど。と言葉の最後に付け加える。

しかし、一夏はそんな勇気の言葉に疑問を感じた。

確かに、篠ノ之束は興味の無い人間には冷たく、無愛想な対応しかない。しかし、自分が興味を持った人間に対しては相手が自分の事を毛嫌いしていても馴れ馴れしく接する人間だ。

少なくとも、専用機を作ってやる程仲のいい人間ならそんな感想は出てくる事が無いと一夏は思っている。

その疑問を口にしようとしたのだが、それは教室に入ってきた別の声によって遮られる。

「あ、二人ともまだ居たんですね。良かった」

二人にそう話しかけるのは、何をどう間違ったのか緑色の髪をした女性。このクラスの副担任、山田真耶 やまだ まや だ。

「山田先生、何か用ですか？」

その存在にいち早く気づいた一夏が質問する。勇気も少し遅れて挨拶をした。

「えっとですね……寮の部屋が決まりました」

そう言つて二人に差し出されたのは、寮室の鍵。鍵は二つあるのだが、二人は別々の部屋なのかそれぞれ違う数字が書かれていた。

「確か、一週間くらいは自宅から通学つて聞いてましたけど……」

「事情が事情なだけに、政府も寮に入れるのを最優先にしたみたいですよ」

やはり前例が無い男のIS操縦者という事で、政府も保護と監視の両方つけたいのだろう。

しかしいきなり言われても、一夏はその為の準備もしていない。何にせよ、一度自宅に戻らなくてはいけないだろう。

一夏がその事を真耶に言うと、答えたのは別の声だった。

「荷物なら私が手配してやった」

声の主は、一夏の姉の織斑千冬。その声を聞いて、一夏は微妙な表情をした。

「着替えと携帯の充電器があれば充分だろう。ありがたく思え」

確かに、生きていくだけならそれで充分だろう。しかし、娯楽に飢えている高校生からしてみれば、少なすぎる荷物でもあった。

しかし、手配してくれた姉に文句は言えない。素直に礼を言つと、切り替えるように疑問を口にする。

「俺は良いとして、勇氣の方はどうなんだ？」

話しに混ざっていなかったとはいえ、一応気にはいたのだろう。視線を勇氣の方に向ける。

「……俺は今まで政府の監視下で生活してたからな。荷物も纏めてあるし、誰か持ってきてくれるだろ」

勇氣は篠ノ之束から専用機を買ったという事もあり、一週間前その存在を公表された直後から日本政府から保護と監視を受けていた。

一夏はその事を対して重く受け止めなかったのか、「へえ……」と他人事のように頷く。

しかし、勇気にはそれよりも心配な事があった。

勇気が纏めていた荷物。そこには、着替えなどの生活に必要な物の他に、“絶対に他人には見せられない物”も入っているのだ。

政府の監視をどうにかくぐり抜けどうにか手に入れたそれを、勇気は安易にも鞆の中に詰め込むだけで出てきてしまっていた。

その事が、勇気を不安にさせる。政府の人間が荷物を持ってきたとして、中身を見られていないか。その上でそれを盗られていないか。

早く確かめなくなった勇気は、机の上に乱雑に置かれていた教科書を鞆に詰め込む。

「あ、じゃあ俺、荷物がちゃんとあるのか確かめたいんで寮に行きますね」

「あ、はい。佐藤君は1029号室ですね」

真耶から鍵を受け取ると、早々に教室を去ろうとする勇気。それを見て、一夏は自分も荷物を纏めながら声をかける。

「あ、勇氣。後で一緒に飯でも食おうぜ。ここって食堂もあるみたいだし」

勇氣は了承の返事をする、教師である千冬と真耶に挨拶をしてから教室を後にした。

自室についた勇氣は、早速自分の荷物の確認をする。

勇氣の荷物は大きめのバッグが二つ。一つは着替えが入ってる物と、もう一つは漫画やゲームなど娯楽用品が入った物だ。

少しだけ着替えが入っている荷物を見たが制服は入っておらず、どうやらもうしばらく学ランで過ごす事になりそうだった。

勇氣はもう一つのバッグに目を向ける。実は、こっちには娯楽用品の他にも、先述した“他人に見せられない物”も入っている。

ここは自室だが、念のために周りに誰かいないか確認する。勇氣の部屋にはベッドが一つしかなく、ここが個室である事が伺えた。

その事に勇気は安堵する。個室ならば、バッグを開けた瞬間にルームメイトが入ってくるという事も無いだろう。

しかし、すぐに気を引き締める。もしもバッグの中身が検査されていたら、中身が没収されている可能性もあるのだ。

勇気は、ゆつくりとバッグのチャックに手をかける。その時、手が震えている事に気づいた。

「ふう……」

ゆつくりと、リラックスするように息を吐く。それでも手の震えは止まらないが、いつまでもこうしていても仕方ない。

覚悟を決めた勇気は、それが洩らない内に チャックを開けた。

「……………あつた」

バッグの中の一番上。安易にも何にも隠されず、開ければ一番最初

に見つかる場所に勇気の求めていた物はあった。

それを確認すると、勇気は確かめるように取り出した。触れてみてようやく安心したのか、勇気は気が抜けたように大きく息を吐いた。

それは確かに、“他人には見せられない物”。

しかしながら、勇気のような人間なら誰でも持っている物でもあった。

人によっては手に入れ難く、どうしても手に入れられない人もいる。しかし、誰でも欲しがってしまうそれは

要は、エロ本だった。

いや、まあ待つてほしい。何をバカなとか、そんな事の為に今まであんなにシリアスに、しかも壮大な感じで伝えてきたのかと思うか

もしれない。

しかしながら、年頃の高校生が自分の持つてるエロ本を他人に見られるというのは想像以上に恥ずかしく、体験した事のある人なら分かると思うが、それはもう自殺したくなるほどで、しかも知られたのが同年代の女子だったら最悪で、だというのに勇気が今居る場所は女子が大半の学園寮で。

「ゆ、勇気、居るか!？」

「うえええい!？」

不用心にも鍵を掛けていなかった扉がノックも無しに開けられた。

勇気は思わず奇声を発し、手に持っていたエロ本をベッドの下に投げ入れた。自分でもありきたりな場所に隠したと思うが、冷静に考える時間が無かったのだ。

「な、何か用か? 織斑」

少し上擦った声で入ってきた生徒、一夏に質問する。しかし、一夏は一夏で何か慌てていたようで勇気の様子に気づく事は無かった。

「それがさ、ルームメイトに追い出されちまってさ……廊下は廊下で凄え居づらいし、避難させてもらおうかと思って……」

一夏の後ろにある開いた扉をから廊下を見ると、多数の女子生徒が勇気達の事を見ていた。しかも、元々女子寮だったせいも全員がかなりラフな恰好をしていて、年頃の高校男子が居づらい空間を作り上げていた。

……エロ本の話題の後にこんな事を言うと勇気に変態だと思われるのだが、高校生の男子なんて大体が欲望に満ち溢れているものなのだ。

「はぁ……」

勇気は大きく溜め息を吐いた。しかしこのままにしておくのも哀れなので、一夏を部屋に入れたのだった。

日常の中に複線が入ってたり入ってなかったり（後書き）

実は、このエロ本がシャルルの話しの時に大きな役割を果たしたり
そうでなかったり……。

次は、一気にセシリア戦闘まで飛ばします。勇気は特訓なんてして
ないんで。日常書くの苦手なんで。

簡単な友情と適当な努力で呆気ない勝利を手に入れるのがこの小説
のモットーなんで（嘘）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2348y/>

IS インフィニット・ストラトス ~完成したIS~

2011年11月17日19時57分発行